

初期コンディヤックにおける  
人間精神の高次の機能の素描  
——『人間知識起源論』の出版後間もない改訂に関連して——

飯 野 和 夫

I. はじめに——思考の批判と修正

人間精神の働きを探求しようとしたコンディヤックが人間精神の「原理」として認めたものは一貫して知覚ないし感覚の能力であった。彼の二つの主著もこの原理に基づいて展開されている。

「知覚、つまり感官の活動によって魂の内に引き起こされる印象は、知性の最初の働き (opération) である」(『人間知識起源論』[1746年刊、以下『起源論』と略], I-II-I-1)<sup>(1)</sup>。  
「判断、反省、いろいろな欲望や情念などは、さまざまに変化する感覚自体でしかない」(『感覚論』[1754年刊], 「この著作の構想」)。

感覚を介した経験を原理に据えて人間精神の働きを探求した先駆者としては、もちろんロックがいる。コンディヤックの最初の体系的著作である『起源論』の序論の最後の部分は、このロックに対する評価に当てられている。コンディヤックによれば、「私たちの知識はすべて感官から来るという原理」をロックは正しく把握した。ただし、この原理を展開することにおいては不十分であった。ロックは『人間知性論』を偶然のきっかけで著したために、その著述に「混乱 désordre」が生じ、それは解消されることはなかった。確かに、ロックも言うように「魂は初めからそのすべての働きを実行するのではない」のだが、ロックは「どのようにして魂がそのすべての働きを実行させるのか、またその進歩の道筋はどのようなものであるか」を示すことはできなかった。

ロックの問題点は、具体的には、記号(言葉)の働きを捉えそこなったことに帰着するようだ。

「ロックは、たとえば、言葉とその使い方が私たち人間の持つ観念にかかわる原理に光を投げかけようということを見て取ったのだが、それに気づくのが遅すぎたため、その著作の第II篇〔観念について〕の主題となるべき問題を第III篇〔言葉について〕でしか扱わなかった。もしこの著作を自ら書き直すことができたとしたら、ロックは人間の知性の諸力をずっと見事に解明できたであろうと推測される。(…) / この〔言葉という〕題材は私の著作の重要な部分でなければならないと私は考えた。なぜなら、この題材は新しくもっと広範な仕方で検討される余地をまだ残しているし、また私の信じるところでは、記号の使用は私たちの持つあらゆる観念の胚を発芽させる原理だからで

ある」(『起源論』序論)。

ロックは、魂が自らの働きを媒介なしに自在に発揮できると思い込み、魂の働きの発揮のために言葉(記号)が必要であることを十分に展開できなかった。

「たとえばロックの想定するところでは、魂は、感官を通してさまざまな観念を受け取るやいなや、意のままに(à son gré)それらの観念を反復し、合成し、無限に多様にそれらをまとめ上げ、あらゆる種類の複合概念を作り出すことができる。」(同所)

「そういう取り違えをしたために、魂の働きを発揮するのにいかに記号が必要であるかをロックは発見できなかった。ロックが想定するところでは、精神は心的命題を作り、そこで精神は言葉を介在することなく観念を結びつけたり切り離したりするのである。」(I-IV-II-27)

ロックの思考とのこうした対話、ロックの思考へのこうした批判から、コンディヤックは自らの思考の役割を自覚していったように思われる。その役割とは、一人の人間のなかで魂の働きは発展するものであり、その発展のためには言葉(記号)が必要である、と証明することであっただろう。一般に、人は立論を修正する中で真理への道を求める。そのことは、多くの人が参画する人類の歴史においては、ある人が他の人を批判し修正するかたちで行われる。人間による認識の発展の歴史の中で、コンディヤックはロックの見方を批判し修正する役割を負ったと言える。

一方、立論の修正は一人の思索家の中においても行われる。上に見たように、コンディヤックは一貫して感覚に原理を求めたとはいえ、その思考には変遷が認められることが知られている。彼は著作を執筆することを通じて、その思考を修正しつつ深めていったとも言える。本論文では、最初の体系的著作である『起源論』を対象とし、この著作が刊行された直後に変更が加えられた意味を検討したい。そこでは、コンディヤックがこの著作の内容の力点を事後的に移動させようとする様子を見ることができるようになる。なお、コンディヤックの思考の変遷を語る場合、『起源論』以後に彼が残した著作や文書類を当然問題にしなくてはならないが、これについては機会をあらためたい<sup>(2)</sup>。

## II. 『起源論』刊行後の部分的改訂

『起源論』全体の最終章、第II篇第II部第IV章でコンディヤックは次のような奇妙な一節を書き記している。

「推論の積み重ねで書かれる著作の場合、著者が順序正しく推論をする限りでしか、言い忘れた論点や、まだ十分には深められていない論点は著者自身の目に止まらない。このことは私がしばしば経験したところである。たとえばこの論考は書き上げられたが、私はまだ観念連関<sup>(1)</sup>の原理の全貌を認識してはいなかった。その理由はもっぱら、二頁ほどの部分があるべき位置になかったことから来ていたのである」(『起源論』II-II-IV-47)。

コンディヤックは、『起源論』を書き上げた時点で、「忘れられた論点」、あるいはむしろ「十分に深められなかった論点」があることに結局は気づいた。それは順序正しく推論しようと努力してきたからであろう。では、この「二頁ほどの部分」とは具体的にはどの部分なのであろうか。その部分は、『起源論』初版ですでに追加されていたのであろうか。コンディヤックは具体的には語っていない。ただ、『起源論』が1746年に刊行された後おそらくはあまり時間が経たない内に、コンディヤックが第I篇第II部第XI章の最後の締めくくりに部分に改訂を施したことが知られている。同じ1746年を発行年としながら、当該部分の内容だけが大きく異なり、その他の部分は全く同じ二種類の版本が確認されるのである。当該部分は、一方の版では§107、§108の二つのパラグラフ（このパラグラフ番号は第II部第I章からの通し番号）からなり、もう一方の版では長い§107だけからなる。改訂部分を除いて同じ組版が用いられていることから、この改訂は初版の出版から時を置かずに行われたのではないかと推測される<sup>(2)</sup>。

この二種類の版のどちらが改訂版であるかは刊本から判断することはできない。内容の相違はその後、二系統の版本が出版され続けるという形で受け継がれる（本節注7参照）。ただし、コンディヤックの生前に限れば、『起源論』は著作集に収められる形で二度刊行され（1769年、1777年）、英訳も刊行される（単行本、1756）が、これらはどれも§108を持たない。結局、この事実から§108を持たない方の版がコンディヤックの生前の意思に沿った改訂版だと判断すべきだと思われる。

さて、改訂部分の長さは1746年の刊本で二頁を少し超える程度である。上に引用した内容とこの改訂を考え合わせると、この改訂が「二頁ほどの部分」を実際に「あるべき位置に」置く操作、つまり、推論の順序のさらなる適正化の試みだったのではないかと考えることも可能である<sup>(3)</sup>。いずれにせよコンディヤックは、改訂版において「まとめ」のためのページを設けて、すでに書き上げられている内容を補足しようとする。

この初版刊行後の改訂を具体的に見る前に、『起源論』のその後の運命を一瞥しておこう<sup>(4)</sup>。コンディヤックはしばしば自著の再版に備えて自著刊本に訂正を加えたが、『起源論』と『論理学』（初版1780年）については訂正入り刊本は残されていない<sup>(5)</sup>。しかし、多くの自著に細かく手を入れていたコンディヤックが、自らの最初の著作である『起源論』についてそれを行わなかったとは考えにくい。『論理学』の方は、『コンディヤック全著作集成 *Collection complete des Oeuvres de M. l'Abbé de Condillac*』の最初の著作として1780年に初版が刊行されたが、コンディヤックは同年8月2日夜に死去するので、刊本にさらに手直しをする時間はなかったと考えられる。一方、この『全著作集成』は、その緒言でコンディヤックの他の諸著作が続いて刊行されることが予告されているものの、実際には他の著作が刊行されることはなかった。このことから、論者に

よっては、続いて刊行される予定であった著作が『起源論』であり、その刊行のために訂正入り刊本はすでに印刷所に渡っていてコンディヤックの許には残っていなかったのではないかと推測している<sup>(6)</sup>。

アルヌー (Arnoux) とムニエ (Mousnier) による編纂で、1798年にパリで刊行された『コンディヤック著作集 *Oeuvres de Condillac*』(全23巻、仮扉でのタイトルは「コンディヤック全集 *Oeuvres complètes de Condillac*」)は、遺作や草稿までも含む網羅的なはじめての全集であるが、コンディヤックが自著の刊本に加えた訂正は、一般に、この全集のテキストに生かされている。しかし、『起源論』については、この全集においても刊本への訂正に基づいた改訂は行われていない。訂正入りの刊本自体も残されなかった。このどちらかのケースになっていけば、『起源論』へのコンディヤック自身のその後の立場はよりはっきりしたと思われる。ただし、仮にコンディヤックが刊本への訂正を行っていたとしても、初版が刊行された1754年から1780年まで、コンディヤックがあえて『起源論』の改訂版を出さなかったことも確かである。こうした事情から、コンディヤックが、上にふれた、『起源論』の初版刊行後間もない改訂で一応はよしとし、それ以上の緊急の改訂の必要は認めていなかったと考えることはできよう<sup>(7)</sup>。

### III. 初版と改訂版の共通部分の検討

では、その第I篇第II部第XI章§107の改訂を具体的に見ることにしよう。その前提として、まず『起源論』の全体構成を確認しておこう。上位の構成は次のようになっている。

————— \* ————— \* —————

第I篇 私たちの認識の素材 (matériaux) について、特に魂の働きについて

第I部 魂と身体の違い、および感覚について (2章構成、全14パラグラフ)

第II部 魂の働きの分析と、その生成過程 (11章構成、初版全108パラグラフ、改訂版全107パラグラフ)

第III部 単純観念と複合観念について (章立てなし、全16パラグラフ)

第IV部 観念に記号をつける働きについて (2章構成、全27パラグラフ)

第V部 抽象について (章立てなし、全14パラグラフ)

第VI部 魂が下していると根拠なく考えられてきたいくつかの判断について、あるいは形而上学における一つの問題の解決 (章立てなし、全16パラグラフ)

第II篇 言語と方法について

第I部 言語の起源と進歩について (15章構成、全163パラグラフ)

第II部 方法について (4章構成、全53パラグラフ)

————— \* ————— \* —————

問題の改訂箇所は第 I 篇第 II 部「魂の働きの分析と、その生成過程」の最終章である第 XI 章「理性、機知、およびさまざまな機知の種類について」の最後の部分（初版の § 107, § 108、改訂版の § 107）である。第 I 篇第 II 部はコンディヤックが人間の魂の働きの発展過程を分析する重要部分である。改訂の対象となる箇所は、この第 II 部の先行部分を振り返り、補足が加えられる箇所である。§ 107 の冒頭は初版と改訂版に共通しているが、まずそれを示そう。引用文中の [1], [2] の番号は、魂の働きの関係を分かりやすくするために便宜的に引用者が付したものである。

「107 私が〔ここまで〕魂のさまざまな働きを考察してきたやり方には次のような主立った利点があるだろう。すなわち、[2] 常識 (bon sens)、機知 (esprit)、理性 (raison)、あるいはそれらの反対物が、ある同じ原理、すなわち [1] 諸観念の相互的な連関という原理からどのようにして等しく生まれてくるのかをはっきり理解できることである。また、さらに遡って、[1] この連関が記号の使用によって生じるということを理解できることである。」

この共通部分で、コンディヤックは、『起源論』第 I 篇第 II 部の全体的内容、つまり最終の第 XI 章で「理性、機知」の生成が論じられるまでの内容のきわめて大まかな骨格を提示していることになる。すなわち、人は、[1] 記号の使用によって観念連関を生じさせ、[2] 理性と呼ばれるものを獲得するに至る、と。

#### IV. 初版と改訂版の共通部分が要約している『起源論』中の部分の検討

このように〈観念連関という原理〉から理性が出現する過程を叙述する『起源論』第 I 篇第 II 部を適切に要約することは難しいが、以下では、コンディヤックの改訂の意味を探る前提として、あえてこの部分の概略を示すことを試みたい。まず、当該部分の目次を再現しておこう。

————— \* ————— \* —————

第 I 篇 私たちの認識の素材について、特に魂の働きについて

第 II 部 魂の働きの分析と、その生成過程

第 I 章 知覚、意識、注意、覚えについて

第 II 章 想像、観想、記憶について

第 III 章 注意によって形作られる観念連関はいかに想像、観想、記憶を生み出すか

第 IV 章 記号の使用が、想像、観想、記憶という働きを発展させる真の原因である

第 V 章 反省について

第 VI 章 観念を区別し、抽象し、比較し、組み立て、分解する際の魂の働きについて

第 VII 章 さまざまな学問的原理の起源についての余談と、分析する働きについて

第 VIII 章 肯定し、否定し、判断し、推論し、概念化すること、すなわち知性

第 IX 章 想像の欠陥と長所について

第 X 章 想像は、それが真理に添える魅力をどこから汲み取るか

第 XI 章 理性、機知、およびさまざまな機知の種類について

————— \* ————— \* —————

次に概略を示そう。まず、「第 I 章 知覚、意識、注意、覚えについて」において、魂の基礎的な働きである知覚、意識、注意が次のように説明される。

「知覚、つまり感官の活動によって魂の中に引き起こされる印象、が知性の最初の働きである」(I-II-I-1)。「知覚についての自覚を与え、魂で生じることの少なくとも一部分を魂に知らせるこの感じ (sentiment) を、私は意識と名づける。」(I-II-I-4)。

そして、注意は「われわれの意識がある知覚に対して非常に強く集中させ、その結果、その知覚だけが自分の意識した唯一のものであったと思ひ込ませてしまうような」働きとされる (I-II-I-5)。

次いで「第 II 章 想像、観想、記憶について」において、知覚相互の「連関」が語られることになる。

「経験の教えるところでは、注意 [という働き] の最初の結果は、もの [実在の対象] (objet) が引き起こした知覚を、ものがなくなった時にも精神の内に残存させることである。ふつうこれらの知覚は、ものが現にあった時にそれらが有していた秩序と同じ秩序にしたがって精神の内に保存される。それによって、これらの知覚相互に連関 (liaison) が形成される」(I-II-II-17)。

知覚も広義の観念であり、ここに現れる「連関」は基本的に「観念連関」と同じものと考えてよい。ここで語られるところに従えば、本来、連関は記号とは無関係に形成されることになる。

一方、上でふれた第 II 部第 XI 章 § 107 では、コンディヤックは「この連関が記号の使用によって生じる」と言っている。一見したところでのこの食い違いについて考えるために、もう少しコンディヤックの展開を追おう。上の引用箇所のすぐ後では、知覚の「連関」から「想像 imagination」の働きが生じるとされる。

「注意はある知覚とあるもの [の知覚] のあいだに連関を打ち立てるが、同じものを [たとえば] 見かけると、この連関の力だけで元の知覚が再現される。この時想像が働いているのである」(I-II-II-17)。

この引用からも読み取れることだが、コンディヤックにおいて想像は、かつて経験し、現在は失われた具体的な「知覚」そのものを「再現」することである。この引用ではまた、想像は、注意によって打ち立てられる知覚のあいだの連関によって成立する、とさ

れたことになる。さて、この想像の延長上に「記憶 *mémoire*」が考えられる。ただし、記憶が呼び起こすものは知覚そのものではなく、あくまでも知覚の名前（記号）、知覚とともにあった状況、あるいは知覚という抽象名詞だとされる（I-II-II-18）。想像は＜知覚そのものの再現＞であり、それに対して記憶は主に＜知覚を指示する記号の再現＞であることになる（I-II-II-17, 18, 25）。

とはいえ、コンディヤックは想像と記憶の間に本質的な違いは認めていない。

「注意しなければならないことは、記号や状況しか思い出せない知覚との関係で私が記憶とよぶ働きは、思い浮かべられた記号や状況との関係では想像なのである。なぜなら、これらの記号や状況も〔それ自体〕知覚だからである。」（I-II-II-25）。

次いで、「第 III 章 注意によって形作られる観念連関 (*liaison des idées*) はいかにして想像、観想、記憶を生み出すか」では先ず、注意によって「観念」の連関が成立すること、注意の元には私たちの欲求があることが確認される<sup>(1)</sup>。

「いくつもの観念の間の連関の原因は、それらの観念が一緒に現れるときに私たちがそれらに対して払った注意をおいてほかにはない。さて、ものごとが私たちの注意を引くのは、ただ私たちの気質、情念、状態、一言で言えば私たちの欲求 (*besoins*) との関係による。結果として、同じ注意が、いろいろな欲求の観念と、それらの欲求に関連するものごとの観念とを同時に含み、それらの観念を結びつけるのである。」（I-II-III-28）

記憶と想像の成立はこうした観念の連関からあらためて説明されることになる。「観念連関 *liaison d'idées*」にふれた後でコンディヤックは次のように言う。

「私たちの知覚やそれらの名前やそれらに伴う状況を思い浮かべる能力〔想像と記憶〕は、これらのもの〔の観念〕とそれらにかかわる欲求〔の観念〕との間に注意が生じさせる連関にもっぱら由来するのである。」（I-II-III-32）

続く「第 IV 章 記号の使用が、想像、観想、記憶という働きを発展させる真の原因である」において、コンディヤックは記号の働きへと踏み込む。これまでは、想像にせよ、記憶にせよ、人がそれを自在に働かせることができるとは言われてこなかった。第 IV 章の次の一節では、記号を、そしてそれを通じて記憶の働きを、意のままに操作できる端緒が語られているように思われる。

「記憶は、(・・・) 観念の記号や、その観念に伴った状況を呼び起こす (*rappeler*) 力の中にこそ存する。そしてこの力は、(・・・) 私たちがたどり直そう (*retracer*) とする対象が私たちが現に持つ欲求のどれかとつながっている限りでだけ発動する。最後に、あることを私たちが呼び起こすことができる (*nous saurions nous rappeler*) のは、そのことがどこかで、私たちが意のまま (*à notre disposition*) にできることのどれかと結ばれている場合に限られる。ところで、偶然的な記号や自然的な記号しか持たない人は、自分の意のまま (*à ses ordres*) になる記号を全く持たない。したがって、彼の欲求は〔受

動的に知覚を思い浮かべる]想像の発動のきっかけになることしかできない。こうして、彼は記憶を持たないはずである。」(I-II-IV-39) (強調、引用者)

人為的に設定された記号 (signe d'institution) は、具体的な知覚とは違って、「意のままに à ses ordres」呼び起こすことができる。コンディヤックは明言はしていないが、ここで「意のまま」になるということは、具体的には、人が人為的記号を容易に操作できることを示していると思われる。人は、欲求にもとづいてこの「意のままになる記号」を用い、記号の作用によって<sup>(2)</sup>、他の記号や状況といった「対象」を「たどり直」すのだし、「あることを呼び起こ」しもするのである。記憶は本来こうした、記号を<能動的に>呼び起こす力であろうし、したがって記憶は記号の連関を<能動的に>たどることもできよう。

上の引用の段階では、想像の知覚を思い浮かべる働きはあくまでも受動的に引き起こされると考えられている。しかし、記憶は「想像の新しい使い方」をも可能にするだろう。

「記憶が獲得されると、その人は自分で想像を意のままにし (disposer de) 始め、想像の新しい使い方をするようになる。なぜなら、自分の意のままに呼び起こすことができる記号に助けられて、彼はその記号に結合した諸観念をしばしば思い浮かべるようになり、すくなくとも思い浮かべることができるようになるからである」(I-II-IV-46)。

記憶が呼び起こす記号は意のままにしやすいので、人は記号を用いることで、それに結びついた観念をも意のままにできるようになる、つまり想像も意のままにできるようになる、とされるのである。結局、人は記号を用いることによって、意のままに「観念連関」を組み替えていくことができるのではなかろうか。先に見たように、私たちが本論文の主題にしている第II部第XI章§107の冒頭部で、「[観念の] この連関が記号の使用によって生じる」と言われていたのも、こうした局面に注目してのことだと思われる。

続けて「第V章 反省について」を見ておこう。注意の働きについては第III章を検討した際に見たが、記号と記憶の助けによって、注意も思いのままに振り向けることができるようになる。「記憶という働きが形成され、自分の力に基づいて想像が発揮されるようになると」、魂は「魂に作用するあらゆる対象への依存状態」から「抜け出し」て、注意を「意のままにできる disposer de」ようになるとされる (I-II-V-47)。そしてコンディヤックは次のように続ける。

「たとえば一枚の絵を前にするとき、私たちは、自然や自然を模倣する際の規則について自分が持っている知識を思い出す。そして私たちはこの絵からその知識へと、またその知識からこの絵へと、(・・・) 注意を順に振り向ける」(I-II-V-47)。

ここでは「観念」がすでに、知識を構成する知的観念をも含意していることが確認でき



る。このように、知的観念を含むさまざまな観念に意のままに注意を振り向けることがとりもなおさず「反省」であることになる。

「私たち自身で、注意をさまざまな対象に、あるいは一つの対象のいろいろな部分に交互に振り向けるやり方が、反省 (réfléchir) と呼ばれるものである」(I-II-V-48)。

『起源論』の後段では、「反省 (réflexion)、つまり私たちの注意を自分自身で意のままにする (disposer de) 力」ともされている (I-II-VI-55)。また、「反省は想像と記憶から生まれる」(I-II-V-48) とされる点もこれまでの議論から理解できよう。

このように反省に初めて言及した後、続く § 49 は、第 IV 章を検討した際に見たところに続いて、再び想像から記号へと遡行している。

「想像の行使を制御し (se rendre maître de) 始めるには、記憶が始まれば十分である。一つの観念を自分で思い浮かべる (réveiller) ことができるには、恣意的記号がただ一つあれば十分である。明らかにここに、記憶と、人が想像に対して持つことのできる力との最初で最低限の度合いがある。この度合いが私たちに与えてくれる、私たちの注意を意のままにする力は可能なかぎり最も弱いものだ。しかし、そうであっても、この力によって人は記号の利点を感じ始める。その結果、この力によって、新しい記号を案出することが有益あるいは必要になるような、少なくとも一つのきっかけを人はつかむのである。このことを通して、この力は記憶と想像がより多く行使されるようにするだろう。したがって、反省もより多く行使されるようになるだろう。」(I-II-V-49)

人は「新しい記号を案出」することで、知識の拡張、体系化を進めていくのではなかろうか。人は記号を用いることによって、意のままに「観念連関」を生み出していくことができる。先に第 IV 章について指摘したのと同様に、この局面においても、「この連関は記号の使用によって生じる」のである<sup>(3)</sup>。

さて、『起源論』第 I 篇第 II 部第 V 章の続きの部分から先は、後段で第 II 部第 XI 章 § 107 の改訂部分を考察する際に、ここまでと同様にやや詳しく検討することにしたい。ここでは、第 I 篇第 II 部の続く部分を簡単に一瞥するにとどめたい。

第 VI 章では、反省の働きの「結果」として、観念を対象とする「区別」、「抽象」、「比較」、「構成」、「分解」といった働きが生まれてくると語られる。次いで第 VII 章では、こうした魂のさまざまな働きが「分析」の働きとして整理される。第 VIII 章では、二つの観念が同じであることを表す「肯定」、同じではないことを表す「否定」、両者を合わせた「判断」といった働きが示され、「推論」は互いに依存する判断の連鎖のことであるとされる (I-II-VIII-69, 70)。第 VIII 章では、これまでに見た働きのいくつかを働かせることで、私たちは事物について正確な諸観念を作り上げ、それら諸観念の間の関係を認識しているとされ、そうした諸観念について私たちが持つ意識が「概念化する concevoir」

という働きである、とされる (I-II-VIII-72)。さらに、「知性 *entendement*」は、知覚から概念化までの「魂のさまざまな働きの集合 *collection* ないし組み合わせ *combinaison*」であるとされる (I-II-VIII-73)

補論的意味合いの第 IX 章と第 X 章を経て、第 XI 章においてコンディヤックは「理性 *raison*」へと到達する。理性は「人間の魂のさまざまな働きを調整する仕方についての認識 *connaissance*」 (§ 92) であり、「魂のさまざまな働きを賢明に導く手段 *moyens*」 (§ 93) である。その「働き」は知性を「仕上げる *couronner*」ものであり、魂の「すべての働きから」 (§ 92)、「魂のすべての正しく導かれた働きから帰結する」 (§ 95) と説明される。こうして、理性はある種の認識であるとされ、あいまいな能力として実体化することは回避される。本章ではさらに「常識 *bon sens*」、「英知 *intelligence*」、「機知 *esprit*」といった働きについても言及される。

以上、『起源論』第 I 篇第 II 部の全体の内容を、最初の 5 章を中心に示した。結局、コンディヤックは、第 XI 章 § 107 の冒頭の初版と改訂版に共通の部分で、第 I 篇第 II 部の全体を数行 (フランス語原文では一文) にまで一気に圧縮したことになる。そこでは、観念連関の原理と記号の重要性が確認されたのである。

## V. 改訂版で削除された内容の検討

ここまでは『起源論』第 I 篇第 II 部第 XI 章 § 107 の冒頭の初版と改訂版に共通の部分を検討した。本節では、初版においてこの共通部分に続く部分の内容、つまり改訂版で削除されることになる部分の内容を検討しておきたい。

初版では、共通部分に続いて、[1] 言語 (= 記号) の「巧みな使用」が [2] 「人間精神の進歩」を実現することが指摘される。初版では、次いで § 108 が立てられる。その内容は、知識の素材とその活用の対比、魂の低次の能力と高次の能力の対比という、『起源論』の先行部分で表明される考え方を再確認するものになっている。共通部分に続く部分の初版における実際の記述は次のようである。(ここまでに使用した番号とも対応させつつ、[0]~[2] の番号で、魂の働きの筆者が理解する形成段階を示す。)

「[私のやり方の利点はまた、] 今述べたことから、[2] 人間の精神の進歩は [1] 言葉を巧みに使用できるということに完全に依存していると理解できることである。この〔観念連関の〕原理<sup>(1)</sup> は単純であり、この問題に明るい光を当ててくれる。私の知る限り、私以前にこの原理をとらえた者は一人もいないのである。

108 私は前に [第 I 篇第 I 部]、魂のさまざまな働きが、感覚と並んで私たちのあらゆる知識の素材 (*matériaux*) であると、何の制限も付け加えることなく述べた<sup>(2)</sup>。今で

は、これをもっと正確に表現することができる。というのは、もしこの命題が魂の全ての働きについて当てはまると理解されるとすれば、それは誤りとなるからである。魂の働きの意味は、[0] 知覚、意識、覚え (réminiscence)、注意、および想像に限定しなければならない。しかも、このうち最後の二つ〔注意と想像〕の行使を私たちは全く制御することができないものと想定しなければならない。魂の働きのこういう段階までは、私たちはまだいかなる知識も持っていない。ただし、知識が形成されるもとなる素材はすべて持っている。[2] その後成立する魂の働きはこうした素材の一部をなすものではない。なぜなら、この働きは素材を活用するものだからである。」<sup>(3)</sup>

「私たちが全く制御することができない」注意と想像とは、外的要因によって生起するものの、いまだ制御できない段階にある注意と想像、いわば受動的な注意と想像を指す。こうして「魂のさまざまな働き」の内に、[0]「知識の素材」となる低次の働き（知覚、意識、覚え、そして、いまだ制御できない段階にある注意と想像）と、[2]「素材の活用」としての高次の働きとを区別すべきことが確認される。こうして § 108 の内容は、知識の素材とその活用の対比、魂の低次の能力と高次の能力の対比という、『起源論』の第 I 篇第 I 部（と第 I 篇第 II 部第 IV 章）で表明される考え方をいわば復習し補足するものになっている<sup>(4)</sup>。一方で、この初版では、§ 107、§ 108 を通して、[1] 記号に媒介された観念連関の成立や、[2] 観念連関による理性の生成の具体的なあり方（第 I 篇第 II 部全体の内容）に踏み込むことはない<sup>(5)</sup>。

さて、§ 107 冒頭の共通部分を除き、それ以降の部分は改訂版では違う文面に置き換えられることになる。特に、削除部分の中心をなす § 108 の内容はあえて語る必要のないものと考えられたと思われる。知識の素材の活用や魂の高次の能力は、コンディヤックの感覚論の斬新さを示している魂の高次の能力の創発ということにかかわっている点で重要である。しかし、素材と活用の対比自体は、『起源論』執筆終了時のコンディヤックにとって主要な関心事ではなかったと思われる。結局、削除箇所は緊要な課題である改訂のために場所を譲ることになるのである。

## VI. 改訂版の内容

すでに見たように、初版の § 107 の冒頭部分は改訂版でもそのまま維持される。改訂版ではこの後、初版に比べて広く魂の高次の諸能力、諸機能に言及されることになる。その言及は、以下の引用中に見られるように、「これまでに述べたこと」の「まとめ *récapitulation*」であるとされている<sup>(1)</sup>。まとめられる内容は、冒頭部分と同様に第 I 篇第 II 部に相当する。

すでにふれたとおり、初版との共通部分では、まず [1] 記号の使用から生まれる観念連関を原理として確認し、次いで [2] 理性など、魂の高次の働きが生じるとされた。観念連関の原理と記号の重要性は改訂版でもそのまま確認されていることになる。次いで、改訂部分では、[1] 観念連関の原理と [2] 理性の働きとから、別のさまざまな高次の、「自在な」働きが派生するとされる。魂のさまざまな高次の働きの生成はそこまでの各章でも展開された。ただ、改訂部分では、そうした高次の働きの生成が、そこまでの各章で初めて提示された際とは、異なった仕方や順序で提示されることになる。

では改訂版の書き改められた部分を確認しよう。改訂は、『起源論』初版の第I篇第II部第XI章を締めくくる末尾部分の内、割愛できると判断された § 107 の後半と § 108 という2頁余りのスペースだけを利用して行われている。これ以外の部分の活字の組み直しは一切行っていない。こうして紙幅が限られ、十分な展開が行えないにもかかわらず多くのことを詰め込もうとしたため、改訂部分は極めて晦渋な一節となっている。そこで、先に [1], [2] の段階を立てたのに続いて、魂の高次の働きの新たな生成の段階と筆者が考えるものを [3], [4], [5] の番号で示すこととし、以下に引用する改訂部分の文章中にも [1]~[5] の番号を挿入する。なお、この改訂部分でコンディヤックが語る内容については、本論文第VIII節で逐次検討する。以下、初版と共通する § 107 の冒頭部分も、再度 [ ] 内に掲げておく。

[107 [私が魂のさまざまな働きを考察してきたやり方には次のような主立った利点があるだろう。すなわち、[2] 常識、機知、理性、あるいはそれらの反対物が、ある同じ原理、すなわち [1] 諸観念の相互的な連関という原理からどのようにして等しく生まれてくるのかをはっきり理解できることである。また、さらに遡って、[1] この連関が記号の使用によって生じるということを理解できることである。] 以上が原理なのである。最後に、これまで述べたことをまとめておこう。

[2] より多くの理性を持てば持つほど、それに比例して私たちはより深い反省をすることができるようになる。それゆえ、この理性という能力が反省を生み出すのである。[3a] 一方では、反省は、私たちが自分で自分の注意を制御できるようにしてくれる。それゆえ、反省が [制御できる] 注意を生み出すのである。[3b] 他方では、反省によって私たちはさまざまな観念を連関させることができるようになる。それゆえ、反省は記憶が生まれるきっかけになるのである。[4] こうしたことから分析が生じ、そこから覚えも形づくられる。さらに、このことがもとになって想像も生じるのである。(ここで私はこの想像という言葉を私が以前規定した [制御できる高次の想像という] 意味において使っている。)

[4] 想像を自力で働かせることができるようになるのは反省という手段によってであ

り、想像を制御できるようになって長い時間を経なければ、記憶を意のままに働かせることはできない。そして、この「意のままに制御できる想像と記憶という」二つの働きが [5a] 概念化 (conception) を生み出す (produire) ののである。

[5a] 知性と [4] 想像とは、ちょうど [5a] 概念化する (concevoir) 働きと [4] 分析とが異なるのと同じような仕方で異なっている。[知性の一部をなす] [5b] 区別し、比較し、組み立て、分解し、判断し、推論する働きについて言うならば、それらはお互いから生まれてくる (naître) のであり、どれも [4] 想像と記憶との直接的な結果である。以上が、魂のいろいろな働きの生成過程である。

重要なのは、これらのことから全体を正確に把握すること、とりわけ [5a] 知性（この言葉を私が普通とは違った意味で使っていることは読者も承知のことであろう）を形成する (former) [4] 魂のいろいろな働きに着目すること、そして、この「形成されるものとしての」[5a] 知性を、知性が生じさせる (produire) [5b] 魂のいろいろな働きと区別すること、である。本書のこれ以降はすべて、これらの区別の上に成り立っている。つまり、これらの区別こそがその土台なのである。この区別をわきまえない者にとっては、あらゆることがらが混乱に陥ってしまうであろう。」

改訂版の § 107 では、「魂のいろいろな働き」は次のような順序で生成すると考えられていることになる。

[1] 記号、観念連関

[2] 理性、反省（この段階以降が改訂部分の内容に対応する）

[3a] 「制御できる」注意、[3b] 「新たな」観念連関、「新たな」記憶

[4] 分析 → 「新たな高次の」覚え → 「制御できる」想像 → 「制御できる」記憶

[5a] 概念化、知性、[5b] 区別、比較、組み立て、分解、判断、推論。

『起源論』第 I 篇第 II 部の改訂部分に先立つ部分においては、記憶は「知覚を指示する記号の再現」であるとされた (I-II-II-17, 18, 25)。また、コンディヤックは記憶を制御できるかどうかについて必ずしも明言してこなかったものの、本論文では、記憶が持つ能動的な性格を抽出してきた（本論文第 IV 節における、『起源論』第 I 篇第 II 部第 IV 章および第 V 章についての分析を参照のこと）。そうした流れを受けるかのように、この改訂部分では、[3b] 記憶が新たな観念連関をたどり、また [4] 記憶が意のままに働かされるようになる道筋が描き出されているように見える。

とはいえ、改訂部分で示される「魂のいろいろな働きの生成過程」は、その提示の順序が、第 I 篇第 II 部でこの改訂部分に至るまでに魂の働きが提示された順序とは大きく異なっている印象を与える。いささか取って付けたような印象も免れない。とはいえ、この改訂がコンディヤックの意思に沿ったものであるのは明らかであり、そのことは十

分に考慮されねばならない。一見するとこれまでの展開と矛盾するように思える提示の仕方にも意味があるのではなからうか。

## VII. 『起源論』第I篇第II部における魂の高次の働き

すでにふれたように、改訂箇所における「まとめ」は、とりわけ魂の高次の諸能力、諸機能にかかわる。そこで、以下では、魂の働きの発展が跡づけられる『起源論』第I篇第II部の内、魂の高次の働きの出現が論じられる第V章以降の内容を確認しておきたい。「第V章 反省について」に関しては、すでに本論文第IV節において一度検討した。§ 49から引用した箇所では、人は「新しい記号を案出」し、高次の記憶と想像、そして反省をより多く行使するとされた。こうして人は知識の組み替え、体系化を進めていくと暗示されているように思われた。

続く第VI章以降では、反省が基になって魂のさまざまな働きが順次現れることになる。「第VI章 観念を区別し、抽象し、比較し、組み立て、分解する働きについて」を見よう。

先行する第II章、第III章では、注意が観念の連関を生み出すことが語られ、第V章では、記号の働きによって思いのままに振り向けることができるようになった注意の働きがとりもなおさず反省の働きであるとされた。本章では、この反省の働きの「結果」(第VI章前文)として生まれるさまざまな働きが検討される。

「反省、あるいは注意を自分で意のままにする (disposer de) 力から、自分の持つ諸観念を別々に眺める (considérer) 力が生まれる」(I-II-VI-55)。これが「区別する」(ibid.) 働きである (以下、第VI章からの引用中の強調は引用者による)。

「諸観念を区別する際に、ある基体に最も本質的な諸性質を、その基体から完全に切り離されたものとして眺めることがある。これは特に抽象と呼ばれることがらである。」(I-II-VI-57)

「反省は諸観念を区別する力を私たちに与えてくれるが、この反省はさらに、諸観念を比較して、それらの間の関係を認識する (connaître les rapports) 力を私たちに与えてくれる。」(I-II-VI-58)

「いくつもの観念を区別した後で、私たちは時として、それらの観念をただ一つの思念を作るものとして眺めることがある。他の場合には、ある思念から、それを構成している諸観念のいくつかを差し引くことがある。これが、諸観念を構成するとか分解すると呼ばれることがらである。こうした働きを介して、私たちは、諸観念をあらゆる種類の関係の下で比較することができ、日々それらの観念の新たな組み合わせを作り上げることもできるのである。」(I-II-VI-59)

区別、抽象、構成、分解には比較的単純な説明が与えられているが、よく見ると、観念

や性質を「眺める *considérer*」とは何か、あるいは、比較にかかわる「関係を認識する *connaître les rapports*」とは何かなど、あいまいな表現もある。他方、確かなことは、魂がそのようなさまざまな働きを生み出す潜在能力を持つと考えられていること、あるいは魂が本来的に持つ感覚の働きがさまざまな働きに分化する潜在能力を持つと考えられていることである<sup>(1)</sup>。また、これらの働きを通じて、人が自在に観念の「新しい組み合わせ」を生み出していくとされていることにも注目しておきたい。

次に、「第 VII 章 さまざまな学問的原理の起源についての余談と、分析する働きについて」から、分析と呼ばれる働きの成立とあり方を見よう。少し長くなるが引用しよう。

「私が思うに、分析することは、先行するいろいろな働きが協力し合った結果でしかない。この働きはただ私たちのいろいろな観念を構成したり分解したりすることにあり、そうすることでそれらの観念をさまざまに比較しようとし、さらにそのことを通して観念どうしの関係や、それら観念が生み出す新しい観念を発見しようとするものである。(・・・) 分析の利点は、それが一度に少しの観念しか提示せず、また常にもっとも単純な階梯に従って提示することである(・・・) 分析が真理を探求するのは(・・・) おのおのの観念の生成を説明することを通してである。このように詳しく見るなら、分析こそが私たちの推論を明白なものにできる唯一の方法であること、したがって、真理の探求において従わなければならない唯一の方法であることが分かる。(・・・) 結論すれば、知識を獲得する唯一の手段は、私たちの持つ観念の起源にまで遡り、それらの観念の生成をたどり、そこにありうるあらゆる関係に照らしてそれらの観念を比較することである。これが私が分析と呼ぶものなのである。」(I-II-VII-66, 67; 強調、引用者)

こうして、第 VI 章で見た魂のさまざまな働きが分析の働きとして整理されたことになる。分析を通して「新しい観念」の「発見」、つまりは、つまりは新しい知識の獲得が目指されていることも確認しておこう。

「第 VIII 章 肯定し、否定し、判断し、推論し、概念化すること、すなわち知性」では、比較した観念が同じであると意識から知らされ、「～である」という言葉でそれらの観念を結びつけて表すこと、これが「肯定する」ことであるとされる。比較した観念が同じではないと意識から知らされ、「～でない」という言葉でそれらの観念を切り離して表すこと、これが「否定する」ことである。この二重の働きが「判断」と呼ばれ、「推論」とは互いに依存する判断の連鎖であるとされる (I-II-VIII-69, 70)。

次いでコンディヤックは概念化の働きを定義する。「ここまでにあげた働き、少なくともそのいくつかを働かせることで、私たちは正確な諸観念を作り上げたのだし、それら諸観念の間関係を認識しているが、その際、それら諸観念について私たちが持つ意識が、概念化するという働きである。適切に概念化するための本質的な条件は、諸事物を

それに適合した諸観念の下で表象することである」(I-II-VIII-72)。概念化は、その成立において先行する働きを前提とし、それ自体の働きにおいて諸観念・諸関係を含む。概念化はこの二重の意味で<統合された認識>あると言えるかもしれない。

最後に、「知性」だが、それは「私たちの知識とは区別される能力」なのではなく、「さまざまな知識がそこにおいて統合される s'unir 場所」なのでもない。「知性とは魂のさまざまな働きの集合ないし組み合わせにすぎない。(・・・) 知覚し、あるいは意識を持ち、注意を向け、再認し、想像し、思い出し、反省する、諸観念を区別し、抽象し、比較し、組み立て、分解し、分析する、そして肯定し、否定し、判断し、推論し、概念化する、これらが知性なのである。」(I-II-VIII-73)

続く「第 XI 章 理性、機知、およびさまざまな機知の種類について」における理性の説明については、すでに本論文第 IV 節でふれた。理性は「人間の魂のさまざまな働きを調整する仕方についての認識」 (§ 92) であり、「魂のさまざまな働きを賢明に導く手段」 (§ 93) であった。その「働き」は知性を「仕上げる」ものであり、魂の「すべての働きから」 (§ 92)、「魂のすべての正しく導かれた働きから帰結する」 (§ 95) と説明された。後段で見るように、本論文の主題となる同じ第 XI 章 § 107 の改訂部分では、「理性」は「能力」とされるが、同じ第 XI 章の先行部分では、理性をあいまいな能力として実体化することは回避されていたといえる<sup>(2)</sup>。

「常識」や「英知」の働きはどちらも概念化したり想像したりすることだが、「常識の対象は簡単で日常的なことの内にしかない」のであり、「より複雑でより新しいものごとを概念化したり想像したりするのは英知の仕事」である (I-II-XI-98)。一方、「機知」は、「魂のさまざまな働きを最も高度な仕方でも導きうる状態、知性の活発さを示す状態」を指すとされる (I-II-XI-99)。コンディヤックは、この機知という極限へ至る途上の魂の能力として、さらに洞察、洞見、識別、明敏、趣味などの概念を説明しようと試みている。

## VIII. 改訂版の内容の具体的検討

改訂版における「まとめ」の内容は、ここまでに見た『起源論』第 I 篇第 II 部の記述にすでに織り込まれていた魂の高次の働きを取り出し、その高次の機能の面から魂の働きを捉え返していると考えられるように思われる。以下、このことを、「まとめ」の文面を逐次、具体的に見ることで確認していきたい。「まとめ」の箇所ではまず次のように語られた。

[2] より多くの理性 (plus de raison) を持てば、それに比例して私たちはより多くの反省をすることができるようになる。それゆえ、この理性という能力が反省を生み出すのである。



ここで「理性」は「能力」とされているものの、本論文第 IV 節や第 VII 節で見たように、第 XI 章の先行する部分においては、理性は「人間の魂のさまざまな働きを正しく調整する仕方についての認識」 (§ 92) であり、「魂のさまざまな働きを賢明に導く手段」 (§ 93) であり、その「働き」は知性を完成させるものであり、「すべての魂の働きから」 (§ 92)、「正しく導かれた魂の働きから帰結する」 (§ 95) と説明されていた。一方の「反省」は第 V 章で扱われた。そこで展開されるころによれば、記号の助けによって記憶が、次いで想像が意のままに行使されるようになると、注意も意のままに振り向けることができるようになる。コンディヤックは、私たちが「この絵からその〔技法の〕知識へと、またその知識からこの絵へと」注意を交互に振り向ける様を語っていた (§ 47)。このように注意を意のままにさまざまな方向に振り向けることが「反省 *réfléchir*」なのであった (I-II-V-48, Cf. I-II-VI-55)。

ところで、この改訂部分では、「理性という能力が反省を生み出す」とされている。理性は反省をも含む「すべての魂の働きから」 (§ 92) 最後に獲得されるはずだが、その理性が新たな出発点となり、理性の生成に与ったはずの反省を生み出すという、それまでの魂の働きの発展の方向とは逆方向の働きが問題にされている。理性は魂の多様な働きの調整についての認識とされるので、そうした理性が「より多く」蓄積すれば、理性は「より多くの反省」の前提となると考えることはできよう。理性が「反省を生み出す」とされているが、これも厳密には「より多くの反省」を可能にする、と表現すべきことかもしれない。結局、改訂部分は「まとめ」とされているものの、実際には新たな補足的な展開がなされていることになろう<sup>(1)</sup>。

[3a] 一方では、反省は、私たちが自分で自分の注意を制御できるようにしてくれる (*la réflexion nous rend maîtres de notre attention*)。それゆえ、反省が〔制御できる〕注意を生み出すのである。

私たちは反省することで「注意を制御」できるようになり、「反省が注意を生み出す」という。そもそも注意を制御し振り向ける仕方が反省だったのだから、ここでは、反省と〈制御できる高次の注意〉という実質的に同じ一つのことについて見方を変えて語っているにすぎない、と見ることもできよう。ただし、前項で見たように、仮に理性が「より多くの反省」、つまりより深い反省を可能にするとして、その延長上で考えるなら、反省は注意をより複雑な、あるいはより微妙な観念に向けることができるようにする、という意味合いがあるかもしれない。

[3b] 他方では、反省によって私たちは諸観念を連関させる。それゆえ、反省は記憶が生じるきっかけとなる。

『起源論』の先行部分では、観念の間に連関が成立する最初の原因は、「それらの観念が一緒に現れるときに私たちがそれらに対して払った注意」であるとされている(I-II-III-28)。対象が「私たちの気質、情念、状態、一言で言えば私たちの欲求」と関係を持つ場合に、その対象は私たちの注意を引く。その結果、「同じ注意がいろいろな欲求の観念と、欲求に関連するものごとの観念とを同時に含み、それらの観念を結びつける」(ibid.)のであった。ここでの注意は受動的であった。「まとめ」においては、こうした受動的な注意に対して、反省にかかわる<制御できる注意>が置き換わると考えられる。よって、ここでは、制御できる注意、つまり反省によって、いわば意図的に新たに観念を連関させていくことが問題になっていよう。

次に、記憶は、操作しやすい記号を対象とすることで、意のままに記号の連関——それゆえ観念の連関——をたどることができると考えられていた(本論文第IV節参照)<sup>(2)</sup>。反省は、新たな観念連関を生じさせることで新たな記憶が生じるきっかけとなると考えられたのではなかろうか。

さて、記号の助けによって記憶が、そして想像が意のままに行使されるようになると、注意も意のままにできるように、つまり反省ができるようになる(Cf. I-II-V-47)——これが『起源論』第I篇第II部の先行部分の主要な論旨であった(前々項参照)。しかし、実は、そうした論旨の中でもコンディヤックは、反省から想像ないし記憶に対する「反作用」について次のような注目すべき記述を残していた(前節参照)。

「そして、反省は、それを生み出した想像と記憶に反作用を及ぼしつつ、今度は想像と記憶が新たに行使されるようにするだろう。こうして、相互的な援助を与え合うことによって、これらの働きは互いの発展のために協力し合うのである。」(I-II-V-49)

この箇所ですでに、反省が想像と記憶の<新たな行使>の可能性を開くとされている。新たな行使の内容は明言されないが、より複雑、より微妙な知覚や観念の新たな連関へと、想像や記憶の行使される領域が拡大すると考えることは許されよう。こうした事態を指して、コンディヤックはいわば比喩的に、反省が想像や記憶に「反作用を及ぼす」としたのではないか。今検討している「まとめ」は、先行部分にもわずかながら認められる、こうした「反作用」の契機を拡大し強調するものだとも言えるのではあるまいか。

[4] そうしたことから分析が生じ、それ〔分析〕によって覚えが形づくられ、

『起源論』の先行部分において、分析は反省が出現した後に置かれ、「先行するいろいろな働きが協力し合った結果」であった。反省(制御できる注意)の働きから、観念を対象とする区別、抽象、比較、組み立て、分解といった働きが生まれるとされ、これらの働きは分析としてまとめられた(同第VI章、第VII章)。分析は、具体的には「私たちのいろいろな観念を組み立てたり分解したりして、それらの観念をさまざまに比較す

ること、そしてそのことを通して観念どうしの関係や、それら観念が生み出す新しい観念を発見すること」とされた (I-II-VII-66)。しかし、分析の定義には厳密さが欠けていると言わざるをえない。

この分析は「おのおのの観念の生成を説明することを通して」真理を探究する。分析それ自体は「方法」であり「私たちの推論を明白なものにする。私たちは真理の探求においてその方法に従わなければならない (ibid.)。結局、分析は、一つの働きを意味するより、むしろ一つの方法概念であった。

「まとめ」の文脈に戻れば、一方で、[3a] 制御できる注意が反省として行使され、他方で、その反省は [3b] 新たな観念連関と新たな記憶を生み出す。そして、これらの働きによって分析の働きが実現する、とされたことになる。

『起源論』の先行部分でも「まとめ」でも、分析は同じように反省の後に置かれている。一見したところ、反省の働きが導かれて以降の魂の働きの発展についての先行部分での展開の順序と、「まとめ」の今問題にしている箇所での展開の順序は大枠において一致しているように見える。ただし、「まとめ」においては、分析も含む知性という「集合」的な働きが、一度は理性として「仕上げ」られたものと想定されている (Cf. I-II-VIII-73, I-II-XI-92)。「まとめ」では、そうした理性の下で「より多くの反省」が行われて、新たな観念連関や新たな記憶が形成され、それらがあらためて分析の働きの形成に関与する、と示唆されているのである。

次に「覚え」を見よう。「覚え」は、第 I 篇第 II 部第 I 章で想像や記憶という関連する働きに先んじて現れる。「知覚が繰り返されると、私たちはしばしば意識から、かつてそれらの知覚を持ったことがあると告げられる」。「覚え (レミニサンス) *réminiscence*」とはそうした意識の働きである (『起源論』 I-II-I-15)。まず、「いろいろな対象を前にして魂が受け取る印象」 (§ 16) は、すでに経験したことがあると認められることがある。次いで、思い浮かべられた (想像された) 知覚であっても、すでに知っているものと認められよう (I-II-IV-37)。いずれにせよ *réminiscence* は、知覚に付随する <その知覚に覚えがあるという意識> であろう。この覚えは「いろいろな知覚の連続が保持している連関」から生じるとされる (I-II-I-15)。この知覚の連関も広義には観念の連関なのである<sup>(3)</sup>。

これに対して、「まとめ」の今検討している箇所では、<分析から覚えが形づくられる> とされる。「まとめ」の文脈において分析は、上で見たように、反省と制御できる注意、そしてそれらが生み出す観念連関と記憶によって実現すると考えられていた。結局、覚えは、先行部分と同様に観念の連関に由来すると考えることができる。ただ、先行部分では覚えが反省を想定しないで考えられているのに対して、「まとめ」では、反省以降の <新たな観念連関> から <新たな覚え> が生じると考えられていることになろう。

さらに、これ〔覚え〕がもとになって想像が生じるのである。(ここで私はこの想像という言葉が私が以前規定した〔制御できる高次の想像という〕意味において使っている。)

想像を自力で働かせることができるようになる(l'imagination devient à notre pouvoir)のは反省という手段によってであり、

コンディヤック自身が断っているように、ここで想像が語られる時、その想像は記号の働きによって意のままに制御できるものとなった想像である。少し前からの流れを再構成すると、(理性 →) 反省 → 観念連関 → 記憶 → 分析 → 覚え → 〔制御できる〕想像、となる。ここでは、理性出現後の反省を新たな出発点とし、記号を介して新たな観念連関が形成される。この新たな観念連関を基として、記号にかかわる記憶が先に成立し、そこから記憶にかかわる覚えが付随的に成立し、次いで記号に結びついた知覚を想像することへと進むのではないか。

「まとめ」では、反省の成立を通過して、この制御できる想像がさらに系統的に発展させられる局面を扱っていると考えることができよう。そうした、新しい局面においては、「想像を自力で働かせることができるようになるのは反省という手段によって」であるとも言えるのではなかろうか。

想像を制御できる (nous sommes maîtres de celui [=l'exercice] de notre imagination) ようになって長い時間を経なければ、記憶を意のままに働かせること (avoir à notre disposition l'exercice de la mémoire) はできない。そして、この〔意のままに制御できる想像と記憶という〕二つの働きが〔5〕概念化を生み出すのである。

『起源論』の先行箇所では、人は人為的(制度的)記号を意のままにすることができ、その記号を用いて、記憶をいわば間接的に「自在に」操作できるとされていた(『起源論』第I篇第II部第IV章§39; 本論文第IV節参照)。これは、前項で見たように、想像が初めて自在に制御されるようになることの前提でもあった。

一方、「まとめ」のこの箇所では、反省が成立した後の、制御できる想像が系統的に発展させられる局面の先に、さらに記憶の新たな展開が語られている。これは初めて語られる内容と言うべきである。人為的記号は意のままにでき、したがって記憶も確かに意のままにできるはずであった。これが制御しうる想像が成立する前提でもあった。しかし、記憶がかかわる記号は扱いやすいはずではあっても、<記号もそれ自体知覚の一種である>ともされる(I-II-II-25)。想像と記憶に本質的な差はないと言える。記憶を「意のままに働かせる」には、実際には、知覚にかかわる想像を「制御」する訓練を積んで、制御の能力を増す必要があるということかもしれない。

さて、『起源論』の先行部分では、私たちが観念に対して行う比較に関連して、順に、肯定、否定(I-II-VIII-69)、判断、推論(I-II-VIII-69, 70)が論じられた。そして、こ

これらの働きのいくつかを働かせることで、私たちは正確な諸観念を作り上げ、それら諸観念の間の関係を認識する。それら諸観念（とその関係）について私たちが持つ意識が「概念化する」という働きであった（I-II-VIII-72；本論文第 VII 節の該当箇所参照）。結局、『起源論』の先行部分では、概念化に到達するまでの魂の働きの展開は概略次のようになろう。観念連関 → 想像の成立 → 人為的記号と記憶の成立 → 想像の自在の行使 → 反省（または注意の自在な使用） → 比較など → 分析・判断・推論 → 概念化（→ 知性 → 理性）。

一方、「まとめ」の今問題の箇所に至るまでの展開は次のようになろう。（観念連関 → 知性 → 理性 → [新たな] 反省（あるいは制御できる注意） → [新たな] 観念連関と [新たな] 記憶 → 分析 → 制御できる想像 → 制御できる記憶 → 概念化。ここでは、理性とその下での反省を新たな出発点として、新たな概念化の地平が語られていると言えるだろう。そして、この新たな概念化は再度、知性そして理性へと集約され、知性や理性の内実を豊かにするのではなかろうか。

[5] 知性と [4] 想像とは、ちょうど [5] 概念化する働きと [4] 分析とが異なるのと同じような仕方で異なっている。

『起源論』の先行部分によれば、知性とは「魂のさまざまな働きの集合ないし組み合わせ」にほかならなかった。知性には知覚から概念化に至る魂のあらゆる働きが含まれた（I-II-VIII-73；本論文第 VII 節）。想像はそうした知性を構成する働きの一つである。一方、私たちは観念に対して比較、分析、判断、推論を行うが、前項でも見たとおり、概念化とはそれらの観念とそれら相互の関係について意識することであった（I-II-VIII-72；本論文第 VII 節）。分析はそうした概念化をもたらす働きの一つである。つまり、想像と分析の働きはそれぞれ知性と概念化の前提となっていた。想像と分析はそれぞれ知性と概念化に対して、前提という「同じような仕方」で関わりを持っている。

なお、コンディヤックの言葉づかいによれば、知性は想像を含むさまざまな働きの「集合ないし組み合わせ」であるのに対して、概念化は分析を含む先立つさまざまな働きが＜統合された＞働きのように思われる。概念化は「そこまであげた働き、少なくともそのいくつかを働かせることで」成立する「認識」「意識」だからである（I-II-VIII-72；本論文第 VII 節参照）。さらに言えば、概念化の前提となる分析自体が、先行する比較の働きが「協力し合った結果」なのであった（I-II-VII-66；本論文第 VII 節参照）。さらに、分析と概念化の対は、想像などととも知性を構成する。したがって、分析と概念化、想像と知性の二つの対は並列的に比較できるものでもない。この部分のコンディヤックの記述は多くの留保とともに受け取るべきであろう。

[知性の一部をなす] [5] 区別し、比較し、組み立て、分解し、判断し、推論する働きについて言うならば、それらはお互いから生まれてくるのであり、どれも [4] 想像と記憶との直接的な結果である。

ここで列挙される魂のさまざまな働きは、「まとめ」の中では初めて現れる。『起源論』の先行部分では、「区別し、比較し、組み立て、分解」する働きは第I篇第II部第VI章で、「判断し、推論する働き」は同第VIII章で論じられ、これらの働きはすべて、「さまざまな働きの集合ないし組み合わせ」である知性の一部をなすとされた(同第VIII章)。先行部分では、魂のさまざまな働きが初めて出現して、知性を構成するまでの過程がたどられ、これらの働きが初めて出現する順序は大枠において決まっていた。

それに対して、「まとめ」のこの箇所では、これらさまざまな働きが「お互いから生まれてくる」とされるのは新しい内容である。これまで検討してきたことから推測されることだが、ここでは、さまざまな働きがひとたび出そろって知性を構成し、さらには理性を獲得した後に、それぞれの働きが互いの成果を利用し合って新たな結果を生み出す局面が語られているのではなかろうか。また、観念の新しい組み合わせを扱うという意味で、これらの働きは、新しい観念を生み出す制御できる想像と記憶を前提とするのであろう。

以上が、魂のいろいろな働きの生成過程である。

重要なのは、これらのことから全体を正確に把握すること、とりわけ [5] 知性(この言葉を私が普通とは違った意味で使っていることは読者も承知のことであろう)を形成する(former) [4] 魂のいろいろな働きに着目すること、そして、この〔形成された〕知性を、知性が生み出す(produire) [5] 魂のいろいろな働きと区別すること、である。

「知性(・・・)を形成する魂のいろいろな働き」は、今し方見た、感覚と観念連関から順次初めて出現する働きである。一方、「知性が生み出す魂のいろいろな働き」は、ひとたび知性を構成する働きが出そろった後に、それぞれの働きが相互に作用し合って新たに展開される働きを指すのではなかろうか。結局、この改訂箇所ではコンディヤックは、知性や理性が形成されるまでの、魂の働きの発展の第一のサイクルに加えて、理性と知性が形成された後の、魂の働きの発展の第二のサイクルを新たに認め、この第二のサイクルの重要性を強調したかったのではなかろうか。

コンディヤックは§ 107の改訂箇所を次のようにまとめることになる。

本書のこれ以降はすべて、これらの区別の上に成り立っている。つまり、これらの区別こそがその土台なのである。この区別をわきまえない者にとっては、あらゆることがらが混乱に陥ってしまうであろう。

これをもって「まとめ」の部分は終わる。『起源論』の全体構成（本論文第 III 節参照）の内、第 I 篇（私たちの認識の素材について、特に魂の働きについて）の第 I 部（魂と身体の区別、および感覚について〔2 章構成、全 14 パラグラフ〕）と第 II 部（魂の働きの分析と、その生成過程〔1 1 章構成、改訂版全 107 パラグラフ〕）が締めくくられたことになる。この後、『起源論』は以下のような構成を持つ。

————— \* ————— \* —————

〔第 I 篇 私たちの認識の素材について、特に魂の働きについて〕

第 III 部 単純観念と複合観念について（章立てなし、全 16 パラグラフ）

第 IV 部 観念に記号をつける働きについて（2 章構成、全 27 パラグラフ）

第 V 部 抽象について（章立てなし、全 14 パラグラフ）

第 VI 部 魂が下していると根拠なく考えられてきたいくつかの判断について、あるいは形而上学における一つの問題の解決（章立てなし、全 16 パラグラフ）

第 II 篇 言語と方法について

第 I 部 言語の起源と進歩について（1 5 章構成、全 163 パラグラフ）

第 II 部 方法について（4 章構成、全 53 パラグラフ）

————— \* ————— \* —————

実際には、これらの部分が書き上げられてから改訂がなされたわけだが、コンディヤックは、これらの部分を読むに際して、理性と知性が形成された後の魂の働きの発展の第二のサイクルを常に念頭に置くように、と呼びかけるのである。

## IX. むすび

1746 年に『起源論』の初版が刊行された後、おそらくは時を移さず、同じ 1746 年の内にコンディヤックは 2 頁ほどの部分の改訂を行った。『起源論』第 I 篇第 II 部の最終第 XI 章の最後の § 107, 108 は、第 I 篇第 II 部の内容を締めくくる役割を持っているが、この部分が改訂されることになる。本論文で私は改訂された文章を検討することで、改訂の時点におけるコンディヤックの意図を探ろうと試みた。

§ 107 の冒頭の数行は初版と改訂版に共通である。ここでコンディヤックは、第 I 篇第 II 部全体の議論の展開を数行（フランス語原文では一文）にまで一気に圧縮して要約している。そこでは、観念連関の原理と記号の重要性が確認されたのである。

この共通部分に続く部分（初版の § 108 の内容）は、改訂版では違う文面に置き換えられることになる。初版では知識の素材と活用、あるいは魂の低次の能力と高次の能力の対比が再度語られていたのだが、この対比自体は、『起源論』執筆終了時のコンディヤックにとって主要な関心事ではなかったということではないか。

一方、改訂版で新たにまとめられる「魂のいろいろな働きの生成過程」は、その提示

の順序が、対応する第I篇第II部で魂の働きが提示された順序とは大きく異なっている。また、改訂された二頁ほどの部分に多くのことを詰め込もうとしたため、改訂箇所は極めて晦渋な一節となっている。しかしながら、この改訂はコンディヤックの意思に沿ったものであると思われ、そのことは十分に考慮されなければならない。一見ただけではこれまでの展開と矛盾するように思われる提示の仕方にも意味があると考えられる。結局、改訂版における「まとめ」の内容は、『起源論』第I篇第II部の記述にすでに織り込まれていた魂の高次の働きを取り出し、その面から魂の働きを捉え返していると考えることができるのではなかろうか。

『起源論』の先行する部分では魂の働きの展開は概略次のようになろう。観念連関 → 想像の成立 → 人為的記号と記憶の成立 → 想像の自在の行使 → 反省（または注意の自在な使用） → 比較など → 分析・判断・推論 → 概念化（→ 知性 → 理性）。一方、「まとめ」の展開は次のようになろう。（観念連関 → 知性 → 理性 → [新たな]反省（あるいは制御できる注意） → [新たな]観念連関と[新たな]記憶 → 分析 → 制御できる想像 → 制御できる記憶 → 概念化（→ 知性 → 理性）。ここでは、理性とその下での反省を新たな出発点として、新たな概念化の地平が語られていると言えるだろう。そして、この新たな概念化は知性そして理性へと再度集約され、知性や理性の内実を豊かにするのではあるまいか。結局、この改訂箇所ではコンディヤックは、知性や理性が形成されるまでの魂の働きの発展の第一のサイクルに加えて、理性と知性が形成された後の、魂の働きの発展の第二のサイクルを新たに認め、この第二のサイクルの重要性を強調したかったのではなかろうか。

コンディヤックは後にガブリエル・クラメール宛ての書簡において、本論文で扱った改訂については特にふれないものの、自ら『起源論』について語っている（1750年9月以降執筆の手紙など）。また、コンディヤックの思考の変遷を語る場合、『起源論』から『感覚論』を始めとするその後の諸著作への歩みも問題にしなくてはならない。これらについては機会をあらためて検討することとしたい。

## 注

### I.

(1) 本論文の引用は特に指定のない限りすべて『人間知識起源論』からの引用である。『人間知識起源論』への参照は、ローマ数字によって順に partie（篇）、section（部）、chapitre（章）を示し、次にアラビア数字によってパラグラフを示して、I-II-III-4 のように表示する。岩波文庫の邦訳（『人間認識起源論』）では、同じ区分を順に部、章、節と訳しているので注意されたい。

(2) 人間精神の感情面の働きについては、コンディヤックの思考の変遷も含めて、次の拙論を参照



されたい。「コンディヤックの動的人間観——欲求の理論とその展開——」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第 XXXIII 巻第 2 号、p.3-26.

## II.

(1) 「観念連関の原理」とその記号とのかかわりについては本論文の第 IV 節で検討する。

(2) 『起源論』の初版刊行年である 1746 年の版は扉のタイトルの下に次のような記載を持つ。A Amsterdam, / Chez Pierre Mortier. / M. DCC. XLVI. (=1746) この記載を持つ刊本には、第一に、当該部分の内容が異なるだけで、あとは判型も含めて全く同じ二種の版が存在する。両者とも「正誤表」を持ち、両者の全体の末尾近くには、上に引用した「二頁ほどの部分があるべき位置になかった」という記述も認められる。他方、同じ A Amsterdam, / Chez Pierre Mortier. / M. DCC. XLVI. という記載を持つが、判型のやや異なる刊本が存在する。こちらは（現在までに確認したところ）すべて長い § 107 だけを持つが、「正誤表」はなく、前述の版の正誤表にかかわる訂正はすでに本文中でなされている。こうした状況からこの版は海賊版である可能性が高い。

(3) 本論文はデリダのコンディヤック論 (Jacques Derrida, *L'Archéologie du frivole*, Galilée, 1990 [初版, Condillac, *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, précédé de l'Introduction de Jacques Derrida intitulé "*L'Archéologie du frivole*", éd. Charles Porcet, Galilée, 1973], 邦訳『たわいなさの考古学——コンディヤックを読む』飯野和夫訳、人文書院、2006) に示唆を受けている。本論文ですぐ前に引用した『起源論』の一節はデリダ自身が引用した箇所である。デリダはこの『起源論』からの引用も含めて次のように語っている。

「提示の順序についての『起源論』中の考察を参照してほしい (I-II-XI-107 および II-II-IV-47)。ここでは特に、コンディヤックが自分の発見が普及するのを長らく制限したり遅らせたりした次のような欠陥の意味について口を閉ざしていることが見てとれよう。『推論の積み重ねで書かれる著作の場合、著者が順序正しく推論をする限りでしか、言い忘れた論点や、まだ十分には深められていない論点は著者自身の目に止まらない。このことは私がしばしば経験したところである。たとえばこの論考は書き上げられたが、私はまだ観念連関の原理の全貌を認識してはいなかった。その理由はおそらく、二頁ほどの部分があるべき位置になかったことから来ていたのである』(『起源論』II-II-IV-47)。この注記、『たとえばこの論考が書き上げられた』時になって著作に書き込まれたこの注記の地位はどのようなものなのか」(邦訳、p.74)。

デリダはここで「提示の順序についての『起源論』中の考察」として、同書 I-II-XI-107 と II-II-IV-47 を例示している。デリダはこの二カ所の相互の関係についてははっきりさせていない。しかし、コンディヤックが II-II-IV-47 で「二頁ほどの部分があるべき位置になかった」と語る事態が、I-II-XI-107 で初版発行後すぐに施された改訂にかかわっている、という可能性をデリダは暗示しているのではなからうか。そうとすれば、§ 107 の改訂こそ「二頁ほどの部分」を「あるべき位置に」置くためになされたのであり、「提示の順序」の組み替えの試みであったことにならう。

(4) 以下の展開には次の研究を参考にした。Chouillet, Anne-Marie, « Les Manuscrits de Condillac », in Sgard, Jean (dir.), *Corpus Condillac (1714-1780)*, Editions Slatkine, Genève-Paris, 1981, p.157-164.

コンディヤックの自著の訂正入り刊本を含む遺稿類は兄であるマブリに遺贈されたが、出版はされず、詳細不明の経緯を経て、マブリの遺言執行者でもあったアルヌー (Arnoux) とムニエ (Mousnier) によってフランス国立図書館に寄託された。こうした事情は、アルヌー、ムニエ編『コンディヤック著作集 *Oeuvres de Condillac*』(1798) の「発行者の緒言 *Avertissement des éditeurs*」に

よって知ることができる。

(5) パリのフランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France) の写本部門 (Département des Manuscrits) には、コンディヤックが、新版刊行に備えて訂正の書き込みをした以下の著作の刊本が収蔵されている。I-II『体系論 *Traité des systèmes*』, III『交易と政府 *Le commerce et le gouvernement*』 1776年版, IV-V『動物論 *Traité des animaux...*』 1776年版, VI『感覚論 *Traité des sensations*』 3e partie, VII『感覚論摘要 *Extrait raisonné du traité des sensations*』, VIII N/A, IX-XX『パルマの王子の教育のための教程 *Cours d'étude pour l'instruction du prince de Parme*』 (Parme, 1775-1776), t. III, V (2 ex.), VI à IX, X (2 ex.), XI, XIII [...] なお、I-XXは一連の訂正入り刊本を分類するため図書館によって付された番号である。また、『感覚論摘要』以外は現在マイクロフィルムによる閲覧となっている。

(6) Chouilletの上掲論文 p.158 参照。

(7) 同じ「1746年」を刊行年として記載している二系統の版本が流布した比率はどのようなものであったかについて、筆者の調査結果を報告しておこう。上に見たように、『起源論』は1746年に初版が、そしておそらくは改訂版も刊行された。その後、コンディヤックの生前には著作集に収められる形で二度刊行され (1769, 1777)、英訳も刊行される (単行本、1756) が、これらはいずれも § 108 を持たない改訂版である。単行本は、20世紀の版は除いて、コンディヤックの没後、1788年、1822年に出版された二種類が確認できる程度である。これらはどちらも § 108 を持つ初版に準拠している。一方、著作集や全集は、著者没後も何度も編纂されて版を重ねており、そこにはほとんどの場合『起源論』が収められている。さて、筆者がフランス4か所、スイス2か所、イギリス1か所の研究用図書館で調査し、ネット上の調査で若干補ったところでは、18-19世紀に刊行され、『起源論』を収めた著作集・全集は、1769年にパリで刊行された著作集を皮切りに10種類の版が確認できた。その内、所収の『起源論』が初版に準拠するものは1種類、改訂版に準拠するものが9種類となる。ここに同じ18-19世紀に刊行された単行本の版を加えると、同時期の初版系統と改訂版系統は4対11となり改訂版系統が優勢である (1746年版については、初版、改訂版、海賊版 [注4参照] を独立させて算入)。なお、アルヌー、ムニエ編『コンディヤック著作集』(1798年)は、網羅的なはじめの全集であり、かつ、そのテキストがコンディヤックが生前行った見直しを反映していることから従来最も重要視されてきたが、そこに所収の『起源論』は改訂版に準拠している。現在よく利用されるルロワ編『哲学著作集』(1947年)やデリダの序文が付されたガリレ社版『起源論』(1973年)もアルヌー、ムニエ版に準拠している (いずれも初版の内容は注で示される)。

ある刊本の図書館に収蔵されている部数は刊行された部数を反映しているわけではないため、両系統の図書の発行部数の比較は難しい。筆者が図書館で実際に確認した全31冊の『起源論』の内、初版系統本が8冊、改訂版系統本が23冊であったことだけを報告しておこう。

#### IV.

(1) ここで連関が一方で欲求と結びついているとされる点について本論文では立ち入らない。この点については次の拙論を参照されたい。「コンディヤックの動的人間観——欲求の理論とその展開」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第XXXIII 卷第2号, 2012, p.3-26。

(2) コンディヤックは記号一般の明確な定義は与えていない。記号とは、「魂の中に引き起こされた印象」(I-II-I-1) が、この知覚が結びついている他の知覚も呼び起こさずにはおかない、その働きを指すと思われる。記号に付与されてきた、自分自身の観念 (pensée) と同時に、意味されるものの観念を自発的に呼び起こす能力は、二つの知覚の間に存在する連関の「力」あるいは「活発さ vivacité」

に取って代わられるだろう (Cf. 『起源論』 I-II-II-17, I-II-IV-38)。現前する対象が不在の対象の観念の記号になるのは、「私たちの知覚の連続が保持する連関」(I-II-I-15)において、現前する対象の像が不在の対象の観念に結びついたことによる。ある記号となるもの(現前する対象)をその意味されるもの(不在の対象の観念)と結びつける関係は、精神の中で、現前する対象の観念とほかの観念の間にあらかじめ連関が存在していることを想定する。Cf. Martine Pécharman, « Signification et langage dans l'Essai de Condillac », in *Revue de Métaphysique et de Morale*, Janvier-Mars 1999, p.81-103.

(3) 本論文ではここまで、記憶についてのコンディヤックの記述の中に、魂が自分の働きを制御し始める萌芽を見てきた。しかし、『起源論』における記憶についての記述には不明瞭な点が残っている。たとえば、「機知」という魂の高次の働きを扱う次の一節では、記憶は制御という点で否定的に捉えられている。「魂の働きにおいて魂が自分自身を制御できないなら、そうした働きは機知の名に値しない。それゆえ、記憶や、それに先行する働きは機知を成り立たせるものではないのである」(I-II-XI-99)。

## V.

(1) 先行する初版と改訂版との共通部分に現れる「諸観念の相互的な連関という原理」を受けている。本論文第 III 節参照。

(2) 『起源論』は、一人の人間が生まれたままで経験する「最初の諸想念 *pensées*」(I-I-3)としての諸感覚と、その諸感覚によって人間の魂の内に引き起こされる基礎的な働きとが、その人間が後にさまざまな知識を形成していく際の「素材」となると考えている。

「§ 3 一人の人間をその生存の最初の瞬間において眺めてみよう。彼の魂はまず、光、さまざまな色、苦、快、運動、静止といったさまざまな感覚を経験する。これが、彼の最初の諸想念である。／ § 4 彼は諸感覚が彼の内に引き起こす事態について反省し始めるが、そうした時の彼を観察しよう。そうすれば、知覚すること、想像することといった魂のさまざまな働きについての諸観念を彼が作り出すのを見ることができよう。これが彼の第二の諸想念である。／ こうして、外部の対象が私たちに働きかけるにつれて、私たちは感官をとおしてさまざまな観念を受け取る。また、諸感覚が私たちの魂の中に引き起こすさまざまな働きについて私たちが反省するにつれて、私たちは、外部のものごとから受け取るのでできなかったあらゆる観念を獲得する。／ § 5 それゆえ、諸感覚と魂のさまざまな働きは私たちのあらゆる知識の素材なのである。反省は、そうした素材を組み合わせることで、素材が含んでいる諸関係を探求し、これらの素材を活用するのである。(・・・)」(『起源論』 I-I-3, 4, 5)

(3) この引用部分に続けて、§ 108 の最後に、コンディヤックは、「魂の働きに関する考察をひとまず中断して、単純観念と複合観念の区別について一言述べておくのが適当であろう、云々」と、続く第 3 部の内容を予告することになる。

(4) 感覚や魂の基礎的な(低次の)働きが「知識の素材」となることについては本節注(2)を参照のこと。この [0]「知識の素材」となる魂の低次の働きと、[2]「素材の活用」としての魂の高次の働きの区別は、魂の働きが外的要因によって生起するか、あるいは魂それ自体によって制御されるか(少なくとも、魂の内的要因に依存しているか)、という違いに対応していると思われる(『起源論』 I-II-IV 参照)。本論文第 IV 節参照。

(5) < [1] 記号に媒介された観念連関の成立 > は『起源論』第 I 篇第 II 部第 IV 章、第 V 章に関係

する。本論文第IV節を参照のこと。また、< [2] 観念連関による理性の生成の具体的なあり方 > は『起源論』第I篇第II部第V章から第XI章までにおいて論じられる。本論文第VII節を参照のこと。改訂版の§ 107でもこれらの内容がそれ自体論じ直されるわけではないが、そこでは、さらにその延長上の魂の働きが問題とされるように思われる。これについては本論文第VI節、第VIII節を参照のこと。

## VI.

(1) *récapitulation* は、「要点を繰り返す・まとめる」といった意味。

## VII.

(1) 魂、あるいは感覚の働きのこうした潜在的な能力については、『動物論』(1755)の第10章でコンディヤックが魂の働きについて述べた部分が参考になろう(邦訳、法政大学出版局、2011、p.165-167)。そこでは大意次のように語られる(1, 2の番号は便宜的に筆者が付したものである)。魂の変様(modifications)は二つの種類、すなわち、1. さまざまな観念を受け入れ(*recevoir*)、それらについて判断する能力と見なされる知性と、2. 魂の運動と見なされる意志、に分けられる。これら二つの概念は抽象概念にすぎないのであって、実体化して考えてはならない。1. 知性の側面において、人間は実際には、諸観念を伝達するのに適した器官と、それらの諸観念を受け入れるように作られた魂とを持っているだけである。しかし、哲学者たちは、叡知的な能力があると言いたがる。2. 意志の側面においても、私たち人間が持つあれこれの感覚に伴う快感や苦痛は、私たちの魂の働きを引き起こすというだけのことである。ところが、哲学者たちは、さらに動力を与える能力(*faculté motrice*)としての意志がなくてはならないと言いたがる。さて、1. 知性に属する魂の働きには、注意、想起、想像、比較、判断、反省がある。一方、2. 意志に属する魂の働きには、欲望、愛、憎悪、情念、恐れ、希望がある。知性と意志という二つの能力は感覚の中に共通の起源を持つ。私たちは諸感覚を持ち、それらを比較、判断し、欲望が生じてくる、それだけのことなのである。

(2) 続く『感覚論』(1754)では、理性それ自体については立ち入った検討はされていない。理性は、定義抜きに日常語のレベルで何度か現れるにとどまる。『感覚論』ではまた、反省は特に「触覚によって可能となる注意」と結びつけられている。なぜなら、「ただ触覚をもつ場合のみ、立像は、これらの変様 [= 魂の変様] を自我から切り離し、自己の外にあるものと判断し、それらから、さまざまに組み合わせられた多くの全体を作り、そこに多くの関係を見分けることができる」からである(II-VIII-14)。しかし、コンディヤックは、「反省はその起源においては注意そのものに他ならないから、それぞれの官能によって生じうると考えることもできよう」(同所注)として、触覚にはこだわらない姿勢も見せている。

『動物論』(1755)では、「私たち自身」によって行われる反省、つまり習慣化していない反省との関係で理性が説明される。「私たちが習慣を超えて反省をなしうる度合いが、私たち人間の理性を構成しているものである」(『動物論』第5章「本能と理性について」、邦訳 p.104)。

## VIII.

(1) 「理性という能力が反省を生み出す」という理性の働きの新しい解釈がその後の著作で続けて検討された形跡は確認できない。その後のコンディヤックの思考がどのような方向に向かったかについては機会をあらためて検討したい。

(2) 本論文第IV節で、『起源論』の先行する第I篇第II部第IV章の内容を検討した部分を参照のこと。操作しやすい記号を対象としていることが、記憶が意のままに記号の連関、さらには観念の連関をたどることができる根拠であると考えられる。

(3) 『起源論』の先行部分において、想像、記憶、覚えという関連した三つの働きは、初めに覚えが語られ (I-II-I-15, 16)、続いて次の章で、想像と記憶が相次いで論じられる (I-II-II-17, 18)。とはいえ、こうしたコンディヤックによる論述の順序にもかかわらず、三つの働きが出現する〈論理上、権利上の順序〉は別に考えることができるかもしれない。つまり、感覚観念を中心とした観念の連関から、想像とそれに原理的に関連する覚えがまず成立し、いわばその派生形として記憶とそれに関連する覚えが成立すると考えられるかもしれない。なお、*réminiscence* には、本文でふれた働き以外に、「私たちに自分自身の存在を認めさせる」働きも付随するとされる (I-II-I-15 [第3段落])。『起源論』の邦訳では *réminiscence* には「想起」という訳語が当てられている。

## 参考文献

\* ここでは本論文で利用したもの、本論文に直接関係するものに限定して掲げる。

### コンディヤックの著作

Condillac, *Oeuvres philosophiques*, Corpus général des philosophes français, éd. Geroges Le Roy, P.U.F., 1948, t.I-IV. (ルロワ編『コンディヤック哲学著作集』)

Arnoux, Mousnier (éd.), *Oeuvres de Condillac*, 1798, Avertissement des éditeurs

Condillac *Lettres inédits à Gabriel Cramer*, éd. Georges Le Roy, PUF, Paris, 1953

以下、邦語文献

コンディヤック『人間認識起源論』古茂田宏訳、岩波文庫、1994年、全二巻 (*Essai sur l'origine des connaissances humaines*, 1746の邦訳、本論文での書名は『人間知識起源論』)

コンディヤック『感覚論』加藤周一、三宅徳嘉訳、創元社、1948年、全二巻 (*Traité des sensations*, 1754の邦訳)

コンディヤック『動物論』古茂田宏訳、法政大学出版局、2011年 (*Traité des animaux*, 1755の邦訳)

### コンディヤックに関連する研究

Jacques Derrida, *L'Archéologie du frivole*, Galilée, 1990 [初版、Condillac, *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, précédé de l'Introduction de Jacques Derrida intitulé "L'Archéologie du frivole", éd. Charles Porcet, Galilée, 1973], 邦訳、ジャック・デリダ『たわいなさの考古学——コンディヤックを読む』飯野和夫訳、人文書院、2006)

Chouillet, Anne-Marie, « Les Manuscrits de Condillac », in Sgard, Jean (dir.), *Corpus Condillac (1714-1780)*, Editions Slatkine, Genève-Paris, 1981, p.157-164.

Martine Pécharman, « Signification et langage dans l'Essai de Condillac », in *Revue de Métaphysique et de Morale*, Janvier-Mars 1999, p.81-103.

飯野和夫「コンディヤックの動的人間観——欲求の理論とその展開——」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第XXXIII巻第2号、p.3-26.